

月刊

いじろのとも

第十三卷

八月号

宗教心のおかげ

アメリカが
多くの人種
抱えても
分裂せずに
行けるのは
宗教心の
おかげだと知れ

日おちる国へ

日いずる国から
日おちる国へと
変わりいく日本

反比例する物と心

物が豊かになるにつれ
心が貧しくなっていく
なぜなのか
日本は
そのトップランナーだが

人生を考え直して

みたい人は(一〇三)

空海『即身成仏義』解説(六)

(四) 六大無礙(げ)にして常に瑜伽(ゆが)なり
 (四) 1 六大総説
 謂(いわ)く、六大とは、五大と及び識となり。
 『大日経』に謂(い)う所の、「我れ、本不生(ほんぶしょう)を覚り、語言(ごごん)の道を出過し、諸過解脱することを得、因縁を遠離(おんり)せり、空は虚空に等しと知る。」是れその義なり。

現代語訳を頼富本宏著『日本の仏典2 空海』(筑摩書房刊)の「即身成仏義」から、引用させて頂きます。

「 * * *
 さて、(二つの詩文に基づいて) 注解しよう。六つの存在要素(六大)とは、世界の存在を形成する地・水・火・風・空の五つの要素(五大)に、精神要素(識大)を加えたものである。

『大日経』の「具縁品(ぐえんぼん)」に述べるとこ

るの、「私は、(万物が) 本来、生起を持つものではなく(阿)、言語表現を超越していること)、もろもろの罪過を離れていること)、原因と条件に左右されないこと(訶)、空の教えが広大無辺な虚空と等しいこと() を知ること(吽)」という詩文は、まさに六つの存在要素を象徴的に表現したものである。(部分にはそれぞれ異なった梵字が入ります)

「 * * *
 今回からいよいよ本題に入って、先々月号と先月号で取り上げました「二頌(にじゆ)八句」の一句一句についての説明が始まります。復習のために、もう一度それらをお読みし、次の通りです。何度も読みなおして味わって頂きたいと思います。

- 六大無礙(むげ)にして常に瑜伽なり 体
- 四種曼荼各々離れず 相
- 三密加持すれば速疾に顕わる 用(ゆう)
- 重重帝網なるを即身と名づく 無礙
- 法然に薩般若(さはんにゃ)を具足して
- 心数(しんじゆ)・心王、刹塵に過ぎたり
- 各五智・無際智を具す
- 円鏡力の故に実覚智なり 成仏

今回から、当分の間は第一条の「六大無礙（げ）にして常に瑜伽（ゆが）なり 体」の説明が続きます。

解説していきます。

まず、六大の説明ですが、簡単には、これまでの解説でお分かりだと思えます。また、詳しくは、今後出てきますので、ここでは、現代語訳に止めておきます。

次の「我れ、本不生（ほんぶしょう）を覚り」ですが、実は、この句が、この第一条の主題になっているのです。ですから、この句が真に理解できれば、後は、すべて分かるというほど、重要な句です。つまり、この句の後に続きます「語言（ごごん）の道を出過し、諸過解脱することを得、因縁を遠離（おんり）せり、空は虚空に等し」と知る「は、この「本不生を覚った」結果、必然的に付随して起こることなのです。

では、「本不生を覚る」とは、一体、どんなことなのでしょう。

現代語訳では、「（万物が）本来、生起を持つものではない」ことを知る、ということになっていますが、この訳文では、真意は、到底、理解できないと思えます。

私の「自己・他己双対理論」で言いますと、本不生を覚るとは、無意識の自己に宿す「煩惱蔵識」と他己に宿す「如来蔵識」とが、統合されることなのです。老子で

言いますと、道を覚ることですし、イエス・キリストですと、神の国を心の中に実現することです。

でも、言葉ではそう言えますが、これらは何れも無意識のことですから、意識してそうできるものではありません。あるいは意識（理性や知性）で、分かることでもないのです。

では、どうすればよいかと言いますと、ひたすら、弘法大師空海の言われることを信じて、修行に励むのです。そして、大切なのは、たとえ一生、知ることができないとしても、お大師さんの教えを常に復習しながら、ひたすら修行することなのです。

そうしていれば、知れたか知れなかつたかにかかわらず、こころに充足感があふれてくるのです。でも、それは、繰り返ししますが、ただひたすら、お大師さんの教えに則って修行するときだけです。それが、続けられるかどうか、われわれには問われているのです。

では、具体的に「本不生を覚る」とは、どんな心境かということですが、それは、一口で言いますと、仏さまと自分が一体であると実感することです。お分かり頂けないかも知れませんが、その時、生死を越えることができますのです。そうなりますと、もう何万年も生きていますし、たとえ肉体は死んでも今後永遠に生きてい

ると思えるのです。般若心経の言葉にあります「不生不滅」の心境です。いつ生まれたのか、いつ死ぬのか、不問なのです。それが、仏さまと一体ということですし、本不生を覚えるということなのです。

次に進みます。この心境は、ただいまは言葉で表現しようと精一杯努力しましたが、元来は「言語表現を越えたこと」なのです。上記のように言葉で、表現しますと、そう思えばそれが本不生を覚ったことなのか、となつてしまいます。でも、そんなことはありません。それは、心境の一部で、それがあから覚ったとはいえないのです。(でも、多くの人は、それに執らわれますが)。

また、この心境に至りますと、「もろもろの罪過を離れる」ことができます。なぜかと言いますと、自分への執着がなくなるからです。財産にも、名声にも、権力にも、生命すらにも、執着しなくてもよくなるからです。そうなりますと、全ての行為は自分のためではなく、他者の幸せのために為す、ということになるのです。その結果が、「罪過を離れる」ということなのです。

また、「因縁を遠離(おんり)せり」という境地は、自らの業を脱して、相対的な因果関係を離れたと感じることができるといふことです。

私の体験でいいますと、四度加行という真言密教の入

門的修行で、「入我我入(仏さまが私にお入りになり、私が仏さまに入らせて頂くという思い)」を体験したのち、今日の自分があるのは、すべて仏さまのおはからいであつて、すべては必然であつたと思えるようになりました。あの家、あの親、あの兄弟、あの先生、あの連れ合い、あの子どもたち、あの職業、どれをとつても全てが必然であつたように思えてきたのです。そして、すべてに感謝することができるようになりました。また、それ以後なすことは、すべて、これも仏さまのおはからいだと思えるようになったのです。ですから、私には、失敗ということは無縁です。すべてが、なるようにしてなっているのです。

最後に、「空は虚空に等しと知る」ですが、ここに出ています「空」は、解脱(空)の境地のことです。「入我我入」の体験でいいますと、自分が、仏さまと一体となり、宙に浮いていて、宇宙(虚空)の中心にいると実感することです。

以上、みましたよう、「六大」について、『大日経』の「具縁品」に述べますことには、このように深い体験の背景があるのです。こうした体験は、語ってみても、お大師さまや私を信じない方には、ただの「たわごと」と聞こえると思うのですが、でも、真実なのです。

自作詩短歌等選

ゆとり教育失敗の原因

ゆとり教育は
やらない前から
失敗に帰しつつある
その原因の一つは
子どもたちに
ゆとりを持たすこと
つまり
教科を少なくする事が
問題行動を少なくし
よい子に育てる方法だ
と考えたことにある

子どもたちが
問題を起こすのは
他己の働きが
弱くなったからなのに
それが
分かっていなかった
でもそれは
大人自身が
そうなっているからさ

日本人が失ったもの

日本経団連の
初代会長になった
奥田碩氏は
共感と信頼を土台とした
国づくりと
国際社会への貢献を
目指したいという
共感も信頼も
いま
日本人が一番
失ったもの
どうして
失ったものを
土台にできるのか

もしそれらを
取り戻すというなら
どのようにして
それが可能なのか

言うは易く
行うは難し

学力低下のみが問題

推薦や
OA入試で
学力が
落ちるは当然
あわてるな
学力以外で
なぜ評価せぬ

日本の規範喪失

子どもを
蹴り殺しても
求刑は
懲役六年
数ヶ月
押入れに
閉じ込めただけで
終生禁固刑
日本と
アメリカで
なぜこうまで
違うのか
規範喪失の
日本の悲しさ

有限な資源・環境

ドイツの家庭から出る
ゴミの量は
日本の五分の一から
十分の一だという
飽食
環境破壊への無関心
質素儉約と
公德心の喪失
地球は一つ
資源も環境も有限だぞ

米国が向かうべき方向

アメリカが
今後
どれほど発展を
維持できるかは
信仰を
どれほど維持できるか
にかかっている
それは
他者への配慮
貧富の差の縮小
ストリート・チルドレン
ホームレスの一掃に
かかっている
しかしいま
アメリカが目指す
ベクトルは
逆に向いているが

マハティールの言葉

マレーシアの
マハティール首相が
辞任する
親日家だった
彼の残した言葉に
次のものがある
日本から学ぶことは
もう何もない
ただ
日本のようにだけは
ならないようにしたい

自作随筆選

米国凋落の二つの兆し

このところ、アメリカの社会崩壊を示すと思われるエポック・メイキング（時代を画すよう）な事件が、立て続けに二件起こりました。一つは、何度も新聞やテレビで報じられましたのでご存知だと思いますが、連続して起こった巨大企業の不正経理の発覚です。もう一つは、毎日、アメリカの学校で行われています。「星条旗に対する忠誠の誓い」が、憲法違反だとする判決です。その判決と言いますのは、誓いの中に「神のもと」という文言が含まれており、憲法に定めた政治と宗教の分離の規定に違反するとする、「サンフランシスコの連邦控訴裁判所」の判決です。

この二つの出来事には、ブッシュ大統領も強い関心をいただいたようで、どちらにも直ちに強いコメントを発しています。前者には、不正会計に関与した経営者への刑事罰を強化したい、また、企業犯罪捜査の特別部隊を新設したい、などと提案していますし、後者には、「ばかげた判決だ」と強い口調で、非難したようです。

この二つの出来事は、多くのアメリカ人にとって予想も出来ないものだったようで、大統領だけではなく、アメリカ議会も強い反発を示しています。例えば、前者には、オニール米財務長官が、「不正な経営をしたペテン師や盗人（ぬすつと）たちに、強い怒りを感じる。こうした悪徳経営者は、刑務所で余生を送ることになるだろう」と述べたようですし、また、後者には、アメリカの上院が、「宣誓は合憲であるとする決議」を全会一致で採択したといっています。

ところで、この二つの出来事がなぜエポック・メイキングな事件なのでしょうが。

アメリカ人にとっては、不謹慎に聞こえるかも知れませんが、私は、この二つの出来事をみて、アメリカもやごと、社会崩壊の程度が、日本に迫いついてきたなあ、という思いをいだいたのです。

と言いますのは、日本では、とつくの昔に、企業家や多くの職業人（いな、国民の大多数）に、モラルハザードが起こっており、企業が不正なことをすることは常識で、誰も、経理に不正があつたことが発覚した位で、今や驚くことはありませんし、まして、学校で国旗に忠誠を誓わせるなどということは、想像することすら不可能なほど、日本人は信仰とは無縁な世界に住んでいるので

す。

つまり、日本では、社会秩序を維持する働きを持つている「他己」が、人びとの心から徐々に消えて来て、社会崩壊が、世界の最先端（トップランナー）を占めてい

るのではないかと思えるほど、進行しているということなのです。

そのもととは言えば、何度も書いてきましたが、戦後、アメリカの民主主義が入り込んで来て、それと裏腹に、徐々に信仰が失われて来たことに、端を発しているのです。

アメリカも憲法では政教分離がうたわれていますが、現実には、学校で「私は合衆国旗と、それが表している共和国、すべての者に自由と正義があり、神のもとで分か

かつことができない一つの国への忠誠を誓います」と毎日、胸に右手を当てて宣誓させているのです。（この誓いの言葉は、英語からの翻訳で、分かりにくいと思いますので、本誌今年の四月号に載せました「日本人が失ったもの」という詩をご参照下さい）。

日本は、アメリカの贈ってくれた憲法の定める通り、「宗教」を完全といえるほど、公立の学校教育から排除

びとから完璧といえるほど消し去ってしまいました。

これまた何度も書いてきましたが、社会規範やモラル（道徳）を支えるものは人びとの心の中の「他己」の働きなのです。その他己の根幹は、この世のあらゆる存在を超えたもの、あるいは、この世に「存在」を贈っている宇宙根源の原理とでもいえるもの、への畏怖の念であり、また、その力を信じて、それに従おうとする心の働きなのです。

そうした存在を超えたものを神と呼ぼうと、仏と呼ぼうと、道と呼ぼうと、空（くう）と呼ぼうと構いません。

あるいは、それが唯一絶対であると考えるか、そうしたものが、ほうぼうに現れており、それらが全て、宇宙根源の原理であると考えるか、たいした問題ではないのです。

要はそうした心の働きが、人びとの心の中に存在しているかどうかなのです。

民主主義は、自己のみを追求する制度です。従って、民主主義が進行するほど、他己の働きが弱まり、その根幹をなす信仰心も失われて来るのです。

アメリカが、人種の坩堝（るつぼ）と言われるほど、多様な民族や人種を抱えながら、黒人を中心とした暴動はありましたが、ここまで国が分裂せずにやってこれた

のは、まさに「正義」を重んずるキリスト教に負つところが大きかった、と私は考えていたのです。

ところが、ここへ来て、「神のもと」という表現を使って、国や国旗に忠誠を誓わせるのは、まさに憲法に規定する政教分離に違反するとする判決が出たわけです。こんな判決は、信仰を失ってしまっている日本人からすれば当然すぎるほど当然なことと思えると思うのですが、アメリカ人には、そんな判決を許すわけには行かないのです。

実は、信仰は、憲法の上位にあるものなのです。かつて、この『こころのとも』でも書いたことがあつたように思うのですが、ドイツでも、学校で行われていますが、神への祈りが、憲法違反だとして争われたことがあります。でも、その訴えに、最高裁判所は、合憲とする判決をだしたのです。

ところが、アメリカでも日本と同様に、国旗に対する誓いは、憲法に違反しているので許されるべきではないとするような、まさに民主主義の原理のみで世の中が動きだした、兆候が現れて来たと言えるのです。

このように、信仰と憲法（民主主義）との地位が逆転してきたことと、経営者が不正な会計処理をするようになったこととは、同じ紙の裏と表のようなものなのです。

どちらも、社会全体に「自己」追求の原理である民主主義が浸透してきて、自分の利益や選好のためには、人倫を踏み倒し、規範、法律、道徳、慣習（いずれも「他己」）、などをないがしろにするようになってきた、ということなのです。

そうなりますと、ブッシュ大統領も言いますように、不正に対しては刑事罰を強化しなければならぬのです。あらゆることを法律で決めなければならぬようになってきているのです。

日本がそうなっていることは、勿論です。社会秩序を維持するために、人びとに何かを守らせようとするとすれば、必ず罰則を伴う法律（や規則）で規制する以外に方法がない、という状態に陥って来つつあるということなのです。

アメリカは、いま外国からのテロによっておびやかされ、それに対して軍事力で対抗しようとしています。しかし、外国の力の脅威よりも、もっと深刻なのは、誰も気付いていませんが、内部の社会的腐敗による社会崩壊の危険性が迫って来ていることなのです。丁度、リンゴは外はきれいで、中から腐ってくるものがあるようにです。アメリカは、中から腐ってきているのです。その兆候が、二つの象徴的な出来事だといえるのです。

釈尊のこつば(一一四)

法句經解説

(三五六) 田畑は雑草によって害われ、この世の人々は愛欲によって害われる。それ故に愛欲を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。

(三五七) 田畑は雑草によって害われ、この世の人々は怒りによって害われる。それ故に怒りを離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。

(三五八) 田畑は雑草によって害われ、この世の人々は迷妄によって害われる。それ故に迷妄を離れたる。

(三五九) 田畑は雑草によって害われ、この世の人々は欲求によって害われる。それ故に欲求を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。

第二章「愛執」の最後の偈になりました。これら四つの偈は、キーワードになるところだけが異

なっています。つまり、「愛欲」「怒り」「迷妄」「欲求」が、偈ごとに異なっています。

順に、みて行きたいと思います。

まず、「田畑は雑草によって害われる」ということですが、農業を体験してみますと、このことがよく分かります。大豆であろうが、さつまいもであろうが、植えたままでは手入れをしませんと、果して大豆やさつまいもが植えてあるのかどうかさえ分からなくなってしまふほど、雑草が生い茂ってきて、植えたものが育ちません。

そのように、私たち人間も愛欲や怒りや迷妄や欲求によって害われれば、人間性がダメになる、ということですね。でも、だからといって私たち人間にとって、この四つの情動を制御することは、とても難しいのです。

何度も紹介しましたが、仏教には、五戒の他に十善戒があります。それは、不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不綺語、不悪口、不両舌、不慳貪、不瞋恚、不邪見、です。こゝが「身」の、こゝが「口」の、こゝが「意」の犯す悪を戒めたものです。私のモデルでは、身は感覚 運動(からだ)、口は認知 言語(あたま)、意は情動 感情(こころ)の働きを示しています。

このうち、「こころ」でなす悪の三つ 慳貪、瞋恚、

邪見を特に三毒といって、他の悪を為さしめる根本悪としています。つまり、ところが間違っていますと、言葉でも間違いを犯しますし、行動でも間違いを犯すということです。

ここであげられています、四つの、愛欲・怒り・迷妄・欲求も「ころ」で為す悪の原因となります。愛欲と欲求は慳貪のもとになりますし、怒りはまさに瞋恚そのものです。また、迷妄は邪見を構成する要素のように思われます。なお、広辞苑によりますと、迷妄とは、「物の道理に暗く、実体のないものを真実のように思い込むこと。また、心のまよい。」となっています。

このような「ころ」でなす三毒を、制御することは、とても難しいことです。ナポレオンも言ったとされていますように「敵に勝つことは易しいが、己に克つことは難しい」のです。現代人が、もっとも大事にしています「あたま」でいくらコントロールしようと思っても、ころは勝手に動いてしまうのです。

実は、ころをコントロールするには、修行がいるのです。たとえば、ヨーガや座禅や読経などです。そうした修行によって、からだ（身）とあたま（口）とこころ（意）とを統合しなければなりません。そうした統合の訓練を重ねていきますと、あたま（認知・言語）で考

えれば、現実にそうすることができるようになりますし、また、悪であるようなことは、もともとしたいと思わなくなってくるのです。

こうしたコントロールができるようになった人は、ですから、とても立派な人といえます。人が人となることは、まさに、自己コントロールができるようになることだとも言えるのです。

ですから、そうした「人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける」のです。ところで、供養ですが、中村元著『広説佛敎語大辞典』（東京書籍刊）によりますと次のようになっていきます。

【供養】 奉仕すること。尊敬心をもって仕え、世話すること。 供え、さしむけること。身・口・意によって物を供えめぐらすこと。諸の物を備えて回向すること。 以下は省略します。

ここで述べられていますような行為をすることで、人は多くの果報を受けます。そうした人は、人としてのお手本を示していますし、決して、悪をなすことはありません。尊敬の念をもって接し、物を供え、さしむけるならば、自らも、ころが清められ、その人をお手本にして、自らのころを制することができるようになるのです。それが、何よりの果報なのです。

後記

一、暑い日が続き、雨が降らないものですから、一日おきに里芋や他の作物に、たっぷり水をやっています。

二、とくに里芋は、乾燥に弱いものですから、カヤで全体をおおい、かなり水をやったつもりだったのですが、それでも不足したらしく、葉っぱの何割かは、それぞれの葉の周辺が枯れています。

三、でも、カヤで畝全体をおおっているお蔭で、それをはぐつてみますと、ミミズがいて、土が団粒状態になっています。里芋の生育には好都合だと思います。

四、先月号のこの欄で、インターネットのホームページのことを取り上げましたが、今月号も新たな話題があります。それは、私のホームページを読んで、感想を寄せて下さった方が始めて現れたことです。(そういえば、前にも一度、私のホームページを読まれて、感想を下されると同時に、コピーが欲しいとおっしゃった方があり、お送りしました。)

五、前の方は中学校の先生でしたが、今度の方は、今年四月から養護学校で七人の子どもたちを受け持つておられる先生のように、私の自己・他己の思想に接して、子どもたちへの関わり方について「何か答えを与えられた気がします」と書いて下さいました。他に、いろいろ子

どもたちのことや、自分が子どもたちに接する時の心の状態などを書いておられますが、最後に「お目に掛かったことはありませんが、畑で麦わら帽子をかぶって汗を流していらつしやるそんな姿を想像してしまいます。熱中症には気を付けて下さい」と締めくくられていました。

六、おっしゃる通り、真昼の作業はとても過酷で、本当に熱中症になりそうな思いがします。ですから、このところ、太陽が出ないうちから畑に行つて、水やりや草刈りなど、一〜二時間、作業をしています。

七、今年初めてスイカを苗で二本植えましたが、大きなものが四個だけとれました。格別の味でした。

月刊 こころのとも 第十三巻 八月号 (通巻 一五二号)	平成十四年八月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひびきのさと）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

